

# パパパパイ!

代表取締役はひきこもり

藤山勇司

徳間書店

第一章

1

下ろしたての五百円玉が指先できらきらと光っている。  
玉田寿樹は伸び放題の髪を背負ったリュックの後ろにやり、狙いをつけて賽銭箱さいせんばうに投げ入れた。「あっ！」  
指先を離れたコインは賽銭箱の棧げんにおっかり跳ねる。視線の先、暴れ馬のようなコインは黒ずんだ縁に当たると、何事もなかったかのようにその身を隠した。寿樹はほっと胸を撫なで下ろし、おずおずと上を向く。  
神頼みか？  
神や仏を、いないと思っっているのに五百円玉を入れてどうなる。どうもなりはしない。手元を離れたコインは賽銭箱に吸い込まれて神社の所有物になる。仮に「すみません、百円玉を入れ

たつもりが五百円玉を入れちゃって、お釣りの四百円を返してくれませんか」と申し出て鼻で笑われるだろう。寿樹は邪念を払うように頭をふんふんと振り、ついでに鈴緒をつかんで揺らしだした。

がらんがらんと真鍮の坪鈴が鳴る。

寿樹は九十度のお辞儀を二度繰り返し、胸の前で拍手を二度打ち、手を合わせて折った。

「ほ、仏…、いや神様。僕、今とんでもないことになっていて。何かから話せばいいのだからないですけど、助けてください！ はは、勝手ですまね。お参りに来たこともないし、クリスマス楽しんでしまっているし、お金だつて五百円ですもんね。でも、勇気を出して来ました。こんな早く起きるのって三年ぶりなんです。いつも外に出るのは日が暮れてからでしたから。神様あ、こんな僕を哀れとお思いになれるなら、どうかお願いします。助けてえ）」

とその時、横に人の気配を感じた寿樹は閉じていた目を開く。どつしりとした黒い革靴から仕立ての良いスーツが伸びている。すつと、上に視線を向けると三つ揃いのスーツ姿の男が二つ折りの財布を閉じている。そして、迷いもせず、一万円札を賽銭箱に入れ優雅に二拝三拍手一拝を終え、踵を返して境界から消えた。

生唾をこぐりと飲み込み、振り返る。男は足取り軽石段を降りてゆく。寿樹はセツとされたロンスグレの後ろ頭が石段の向こうに消えるまで見つめた。

力が抜け、肩を落とした寿樹は、糸が切れた風のようにふらふらと賽銭箱を離れ、社殿の西の

端に用意されたベンチに腰を下ろした。

「女王様あ」

寿樹は唯一の相談相手、ネットのハンドルネームの名を口にした。

女王様は女だと思ふ。実際に会ったことはない、男かもしれないが、言葉遣いから見て女性性、しかもハンドルネームからしてかなりのドSだ。ただ、彼女の言葉は寿樹を突き動かしてくる。

彼女との出会いは二ヶ月前、門前仲町に越してすぐ、前触れなく舞い込んだメールアドレスが縁だつた。

「M男をたんと釣り上げる場所をお作り。サパーは用意してあげる」

完全な上から目線だつた。ただ、女王様のサパー内部には最新のツールが装備されていて、使い放題。夢のような環境に突き上げる喜びを感じた。

寿樹は寝る間を惜しんでサイトを作成し、女王様に「女王様の館』完成したなう」と送信。Eメールを打った瞬間、寂しさを感じた。

翌日、「褒美をやろう。お前の銀行口座をわらわに伝えるが良い」とのメールを目にした寿樹は「褒美なんていりません。僕はあなた様の家来です。何卒今のままお傍にお使えいたしたく」と送った。すると、間髪入れず返信があつた。

「殊な心がけ。わらわがお前を導いてやろう」

感動の涙、春樹は家来の許しを貰い、今に至っている。

十二年の間、引きこもっていた。

高校は都内屈指の進学校、片道一時間半の距離にある快晴高校に入学した。もともとと身体の線が細く、女性に間違われるほど。我慢がならなかったのは通学電車内での痴漢。パニック症候群になり、学校を休学した。そして、一年が過ぎて退学……。

ただ、学歴に異常な関心を燃やす母親のすすめで通信制高校に編入した。いや、今考えれば離婚した父親からの養育費に関心があったのかもしれない。一ヶ月に一度のスクールのには母親に付き添ってもらった。一年遅れで私立の雄、稲穂大学に入学したものの、やはり学校に通えなくなりました。二年前に除籍に処された。何もやってなかったわけじゃない。学校に通えない分、国家資格を取得しつつ、ネット技術を習得した。今では、ホームページやサイトはもろろん、アンドロイドアプリを作成している。まだ、収益を得るまでにはいたっていないが。

人生は分らない。このまま過ごせると思っていたら、とんでもない落とし穴が待っていた。広告代理店を営んでいた父親が行方をくらました。まあ、一年前から養育費が打ち切られたのでどうでもいいのだけれど。そして、理解のできないうアセッションズの妹が彼氏を家に連れて戻ってきた。驚いたことに萬飾柴又の自宅に一緒に住むという。春樹は三人の視線に耐えられなくなった。

「一人で暮らしてみるよ……」  
 そう、呟くと。母親も妹も、そして妹の彼氏も満面の笑み。春樹は自分で自分の退路を断ってしまった。しばらくすると、家も決められて引越しの段取りが滞りなく進んだ。アリさんマークの引越し会社の皆さんがダンボールを整然と積み込んでゆく様は見事だった。呆然と突っ立っている春樹がいまいかのようにもくもくと働き、一時間もしないうちに、ちりひとつなくなってしまう。最後にビニール製の箒で日焼けしたフロアリングを丁寧に掃き、モップがけまですませた。  
 タクシーに乗せられて連れてこられたのは、江東区の門前仲町の南、裏路地の陽当たりの悪い二〇平米の1R〇〇坪だった。  
 「ロフトだから暮らしやすいですよ」と妹の彼氏に告げられた。あとで分かったのは、彼氏が暮らしていたアパートだった。母親から「母さんができるのはこれくらいだけど、頑張ってるね」と封筒を渡された。封筒の中身は三十万円、手切れ金だった。

日一日と金がなくなっていく。

そんな時、出会ったのが女王様だ。

春樹が現状を説明した後、「これから僕はどうしたらよいのでしょうか。このままだと二ヶ月先には無一文になります」とすがり付きようなメールを送信すると、女王様は指令を下された。二日後、富丘八幡宮に参拝し、おみくじを買い求め、木場のハローワークに行け。実行するま

で、耳掃除を禁止する」

背中がぞくぞくするほど嬉しかった。

女王様から下された最初の指令は今でも鮮明に覚えている。

「お前の部屋は汚い。隅々まで一点の曇りもなく掃除すべし。実行するまで、背中を掻いてはな

らぬ」だった。

目にしたとき「? ? ?」がいつぱいだった。

ただ、そのメールを見た瞬間に背中がもぞもぞとした。痒くなつたのは肩と背中の間、春樹は

急いで確認のメールを送った。

「左の肩のちよつと横も背中でしょうか？」

「当たり前だ。部屋を片付けるまで禁止する。綺麗になつた様子はデジタルカメラで添付するよ

うに。この程度で音をあげるようであれば、わらわの家来と言えぬ」

やっぱりそうか、と口にした春樹は首をすくめた。

ベンチに腰を下ろした春樹の左手が無意識に耳に向かう。敏樹は右手で左手をつかんでおろし

た。

「だめだ。ちゃんとしなさい」と

春樹の耳の穴は二日前、指令を見た瞬間から痒い。でも、課題を実行したあと、思う存分掻く

ことを想像すると、よだれが流れるほどだ。事実、最初のときもそうだった。三日かけ、部屋の

隅々まで掃除をして写真を撮り、完了メールを送信した。もちろん、家具も動かしてその背後も。

部屋の配置を図面に起こし、どこから写真を撮ったのかも添えた。女王様のお言葉はぞくぞくす

るほど嬉しかった。

「よくぞやり遂げた。思う存分背中を掻いても構わぬ」

掃除道具を買い求める際、孫の手もついでに買っておいた。背中全体が性感帯になつたほどの

快感。あの時のことを思うと、今耳の穴を掻くのはもったいない。

今日二つ目の指令、「おみくじ」を買うためにベンチから立ち上がると、寛永四年（一六二七

年）に創建された富丘八幡宮の境内が眼前に広がる。社殿前には春樹とロマンスゲームのお賽銭、

少なくとも一万五百円を飲み込んだ賽銭箱がぞ知らぬ顔をして鎮座していた。鼓動にシンクロす

るように視界は脈動する。春樹は（あと少し、もう少し）と自分に言い聞かせながら歩く。境内

の東にあるおみくじ売り場の前に辿りついた時、心臓は早鐘を打ち、口の中はからからに乾いて

いた。

春樹は背中のリュックを下ろし、ジッパーを開く。そしてチェーンのついた財布を取り出すと

おそろをおそる言った。

「おみくじを一つ」

「恋婆成就、病改善、就職祈願、学業成就、交通安全など様々ございませうが、どれにございませう

か？  
「え？」  
「富丘八幡宮では参拝された信徒の皆様により良い響きをいたすため、細分化しております」  
「しゅ、就職で」  
「それでは二千円となります」  
「二千円……」  
「それとも、一般的なおみくじの二百円になさいますか？」

寿樹の脳裏にロマンスグレイの後頭部が浮かんだ。

「二千円の就職祈願で」

「それでは、おみくじをお引きください」

白い衣装の巫女の手が目の前にくる。寿樹はふっと、顔を上げた。

まるで、釈迦如来のようにふくよかな女性と目が合う。黒く太い豊かな髪が両肩に拡がっている。まるで、平安絵巻の中から抜け出したようだ。寿樹は顔が赤くなるのをどうすることもできない。ふくよかな巫女は鈴を鳴らすような声で言葉をつないだ。

「おみくじは右に三度回し、左に一度お回ししてお引きください」

寿樹はがらがらとおみくじの箱を言われたとおりに回し、くじの棒を手にして言った。

「一八番。あつ、それと二千円」

巫女は悠然と微笑みながら二千円を受け取る。そして、手前の引き出しを開くと、直訴状のような封書を取り出した。

「こちらでございます」

「あ、ありがとうございます」

寿樹の指先がふくよかな巫女の手に触れた。

「あつ」

巫女の口元から声漏れた。寿樹は「すみません」と声を出し、玉砂利を鳴らしながらずり下がる。

二つ目の課題をクリアした寿樹は石段に向かう。視界の右端には賽銭箱。だが、先ほどとは何かが違う。足を止め、賽銭箱に目を向けた寿樹は手にしたリュックを落としそうになった。そこで肩が盛り上がり首のない猪のような男が大声で叫んでいたのだ。

「富丘の神さん、どうか、どうか、どうかよるしくお願い申し上げます。俺は素人乗になる決意をいたしました。悪に強い善にも強いと申します。どうか、俺のこれからをご覧くださいますよう！ よるしく、よるしくお願い申し上げます！」

猪男はそう口にするど鈴緒を掴み、力任せに振り回す。坪鈴は悲鳴のような音をあげ続ける。しばらくすると、神社の中から人が出てきた。猪男は「はっ」とした顔をして頭を掻いている。寿樹は係わり合わないよう、逃げるように石段を下った。

富丘八幡宮の石臺の道を進み、山門まで下る。左右には目が眩むほど高い杉の木が整然と並んでいる。寿樹は後ろを振り返りながら急ぎ足で抜ける。猪男に追いつかれぬように木場のハローワークは馬鹿でかい石造りの鳥居を抜け、永代通りを東に四百メートル先の橋のたもとを左に進んだ場所にある。

ばくばくと鳴る心臓に手を当てた寿樹は目を伏せ、誰にも話しかけられぬよう祈りながら歩く。ガリンスタンドを過ぎると、永代通りは緩やかな上り坂に差し掛かった。落ち着いたはずの心臓はその光景に驚いたのか、再び鼓動を早める。女王様から下された三つ目の指令を実行するにはここを抜けなければならぬ。寿樹は額に浮かぶ汗を手の甲で拭き登った。

ふいに背中がぞくぞくする。

振り返ると、遠くに先ほどの猪男の姿が見える。

寿樹は瞞目もふらず、前を向いて先を急いだ。

これほど歩いたのは何年ぶりだろうか。最後は駆け足になっていた。なぜなら、猪男は盛り上がった肩を左右に振りながら寿樹のあとをついて来たからだ。きつと、アイペースで歩き続けていたら、追いつかれていた。

寿樹はまだ後をついてくる猪男を振り切り切るように木場のハローワークの中に入る。エントランス

又は三階までの吹き抜け、一階にはソファが弧を描くように丸く配置され、壁際にはテレビがあった。

濃紺のジャンパーを着た中年の男性が力なく座る一階を抜け、エレベーター前に行く。

その時、猪男がエントランスに現れた。黒と白のストラインのジャケットを肩にかけ、長い楊枝を口に咥えていた。

訳が分からない。

ああいう輩がハローワークに何の用事があるのだろうか。ぐるぐると最悪の事態が駆け巡る。楊枝を咥えた猪男は辺りを見ている。そして、寿樹を見つけると、にたりと笑った。

顔が引きつるのが分かる。

寿樹はエレベーターにびったりと吸い付くように立ちすくむ。

しばらくすると、肩をぼんと叩かれ振り向くとあの猪男が楊枝を上下に振りながら立っていた。「そんなとこ立ってたら、邪魔だら」

「すみません」

寿樹は足をちよこちよこ横に動かしてずれる。顔を合わせる勇気はなかった。

木場のハローワークの内部は事前に動画や画像で確認しておいた。迷わぬよう、人に聞かないで済むようにするつもりだった。

なのに！